

# GHQ による検閲への安部公房の眼差し ——『牧草』と『デンドロカカリヤ』の改稿を通して——

解 放

## The Revision of Text and GHQ's Censorship in Abe Kōbō: "Bokusou", "Dendrocacalia"

XIE FANG

### Abstract

Abe Kōbō is one of the representative writers of post-war Japan. In the late 1940s, he published many works centered on his experience in colonized Manchukuo. However, GHQ controlled Japan at that time, and the censorship of GHQ had a great influence on his literary creation.

This study focuses on "Bokusou" and "Dendrocacalia", which are representative stories of Abe's early works. Compared with the first edition of "Bokusou", the revised edition shows the violence of the character. The reason is that when Abe published the first edition, he was trying to avoid one of the censored items by GHQ, which is to express violence. The first edition of "Dendrocacalia" was published when the censorship by GHQ was about to be abolished. Thus, even if there was a discourse violating the censored items, it was still possible to publish normally. In addition, in the revised edition, which was published after the occupation, there were many references to the remaining influence from GHQ.

The study aims to clarify that Abe Kōbō was conscious of the censorship by GHQ while doing literary creation by analyzing the difference between the first editions of "Bokusou" and "Dendrocacalia", which were published during the period of GHQ's censorship and their revised editions, which were published after the GHQ's censorship.



## 目次

## はじめに

1. 「闇」で機能する検閲
2. 登場人物の差異と検閲——『牧草』
3. 検閲に関する安部公房の変化——『デンドロカカリヤ』

## おわりに

## はじめに

前衛的作品で名を知られる安部公房は、戦後日本文学を代表する作家の一人である。引揚げ者として1946年10月に満洲から日本に戻った安部は、その後間もなく創作活動を始めた。留意しなければならないことは、安部が文学創作を開始した時には、日本はアメリカを始めとするGHQに統治支配されていた点である。占領下の日本は各方面においてGHQの政治的抑圧を受けていた。とりわけ、GHQによる言論統制という政治的・社会的抑圧は、当時の文学創作に多大な影響を与えた。政治に関して常に敏感であった安部公房が、GHQによるこうした言論統制に対して無反応だったはずがない。しかし、GHQの検閲と安部公房の初期作品との関連性を論じた研究は非常に少ない。

安部が作家として文壇にその名を広く知られるようになったのは、1951年2月号の『近代文学』に掲載された『S・カルマ氏の犯罪』が第25回芥川賞を受賞してからのことである。従来の安部公房研究は、『S・カルマ氏の犯罪』以降の作品に集中する傾向が見られる。その一方で、40年代の作品に注目する論考は少ない。40年代に出版された安部の小説は、後に改稿され、改めて出版されたものが多い。例えば、処女作『終りし道の標べに』は1948年10月に真善美社から刊行されたが、大幅な改稿が施されて1965年12月に冬樹社から改訂版が出版されている。

また、安部は1968年4月に『夢の逃亡』という短編集を刊行している。この短編集に収録されている

編の小説は、『犬』(1954年)を除けば全て40年代に既に発表されていたものである。注目すべきは、『夢の逃亡』に収録されている小説が、それぞれ初出版から大きく改稿されていることである。従って、安部公房の初期作品、とりわけ40年代に発表された作品の特徴の一つは、改稿されていることだと言えるだろう。しかし、こうした改稿に視点を置く先行論も数多くはない。

本論文では、『夢の逃亡』に収録されている『牧草』と、安部の最初の変形小説『デンドロカカリヤ』に焦点をあて、初出版と改訂版との差異を確認した上で、テキストの差異とGHQによる検閲との関連性を検討する。こうした検討を通して、安部公房がGHQの検閲を意識しながら創作していたことを論証したい。

## 1. 「闇」で機能する検閲

GHQの検閲は事前検閲と事後検閲に分けられる。事前検閲とは、書籍や雑誌が刊行される前に、原稿を検閲当局に提出することである。事後検閲とは、書籍や雑誌の刊行後、当局に出版物を納本するものである。GHQによる検閲の期間については諸説ある。『GHQ 日本占領史・第17巻・出版の自由』(日本図書センター、1999年)によれば、出版物の検閲は1945年9月3日から開始され、1949年10月31日に廃止されている。そして、雑誌の事前検閲は1945年9月19日から始まり、1947年10月10日から事後検閲に変わった。書籍の事前検閲は1945年10月21日に始まり、1947年10月15日から事後検閲に移行している。しかし、山本武利は『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店、2013年)において、雑誌の事後検閲は1947年10月から始まり、書籍の事後検閲は1947年11月から始まったとする異なるタイムラインを主張している。

GHQによる検閲の推移がこのように複数なものとなっているのは、検閲自体が非公開であっただけでなく、49年10月に検閲が廃止される際、その資料がすべて廃棄処分となったために、検閲に関する研究が困

難になったことが理由として挙げられる。そのため、当時の検閲の実態を正確に描き出すことは困難である。本稿では山本武利の著作に書かれた時期を基準とする。

GHQ の検閲項目は合わせて 31 項目ある<sup>1</sup>。しかし、当時はこの項目は非公開であったために、一般人がその内容を知ることはできなかった。極秘に実施されていた検閲は、言論の自由を奪い、戦後日本が半植民地化されていたことの象徴となっている。後の研究で明らかになった 31 項目は次の通りである。

- 1、最高司令官批判
- 2、軍事（極東）裁判批判
- 3、最高司令官による憲法起草という批判
- 4、検閲への言及
- 5、合衆国批判
- 6、ソ連批判
- 7、英国批判
- 8、朝鮮人批判
- 9、中国批判
- 10、他の連合国批判
- 11、連合国の一般的批判
- 12、満州国における日本人処遇の批判
- 13、連合国の対戦前政策批判
- 14、第三次世界大戦に関する論評
- 15、ソ連対西欧諸国の対立に関する論評
- 16、戦争宣伝の擁護
- 17、天孫降臨民族宣伝
- 18、軍国主義宣伝
- 19、国家主義宣伝
- 20、封建思想の賛美
- 21、大東亜（共栄圏）宣伝
- 22、一般的宣伝
- 23、戦争犯罪人の弁護の正当化
- 24、占領軍将兵と日本人との(男女の)親密な関係描写
- 25、闇市取引きの記述
- 26、占領軍批判
- 27、飢餓の誇張表現

28、暴力または社会不安の煽動

29、真実でない（不正確な）記述

30、最高司令官（または地方部隊）への不適切な言及

31、時期早尚な情報の公表<sup>2</sup>

上記の項目を見れば、GHQ による検閲は、軍国主義思想などの抑制を最大の目標として、戦後の日本を、戦前や戦中の記憶と切り離すことに力点を置くものである。戦後の日本は、こうした GHQ による言論統制といった政治的抑圧のもとで出発して、作家たちも例外なく、このような抑圧のもとで創作を行っていた。

しかし、安部に関して言えば、GHQ の検閲期間中に彼が発表した小説やエッセイは発禁処分を受けていなかった。ただし、安部が GHQ の検閲や検閲項目を十分了解していたことは確かである。例えば、1947 年の 6 月と 7 月に書かれた中埜肇あての書簡には、GHQ の検閲印が押されており、この際に、彼は検閲の実態を初めて具体的に理解したはずである<sup>3</sup>。安部は検閲中に刊行されたエッセイ「シュールリアリズム批評」において、次のように書いている。

意識は絶えず無意識界の作用を検閲し、その表出された質が無害であるときにだけ表出を許すが、さもない場合はそれを変質あるいは抑圧しようとする。その選択性は社会的関連に於て捉えられなければならない。[...] 抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない<sup>4</sup>。

「シュールリアリズム批評」は 1949 年 8 月 3 日に雑誌『みづゑ』に掲載されたもので、GHQ の検閲期間中に発表されたものである。安部はエッセイでフロイトの精神分析とシュールレアリスム芸術創作との関連性を論じているが、引用部分では、「検閲」という言葉が使われている。ここでの「検閲」とはフロイトの精神分析で用いられる言葉だが、安部は心的構造に関して用いられる「検閲」と、GHQ による検閲が類似

していると考えていたのかもしれない。安部のみではなく、GHQ の検閲への配慮は当時の作家たちが共有していた認識だと思われる。

例えば、1946 年 8 月に刊行された『歴透』という雑誌に、「次の各項に該当する記事の掲載は聯合軍總司令部民間情報部の指令によって禁止されてゐますから御注意下さい」<sup>5</sup>と、検閲に関する 13 項目が列挙されていることは注目に値する。『歴透』はこの 13 項目を公表したことによって検閲を受け、「違反 (Violation)」であるとして処分を受けたが、非公開の検閲項目の一部が外部に流出していたことはこのエピソードからも確実であると思われる。更にその一年後、上月木代次が「私の創作態度」というエッセイで、『歴透』に書かれている 13 項目をそのまま引用し、「しかし、唯一言、次のことだけは心得ておかないと、思わぬわざわざを招くから、十分注意を要する。それは總司令部から發表された「創作執筆上の禁止項目」である。掲げて参考にしておきたい。」<sup>6</sup>と述べている。その 13 項目とは以下のようなものである。

- A 軍國主義を鼓吹するもの
- B 仇討ちに關するもの
- C 國家主義的なもの
- D 愛國主義的または排外的なもの
- E 歴史の事實を歪曲するもの
- F 人種的または宗教的差別を是認したもの
- G 封建的忠誠心または生命の輕視を好ましいことまたは名譽あることとしたもの
- H 直接間接を問わず自殺を是認したもの
- I 婦人に對する壓制または婦人の墮落を取扱つたこれを是認したもの
- J 民主主義に反するもの
- K 残忍、非道、暴行を謳歌したもの
- L 兒童搾取を是認したもの
- M ポツダム宣言または聯合國總司令部の指令に反するもの<sup>7</sup>

この 13 項目は、前掲の 31 項目と重なるところが多

い。例えば、「A 軍國主義を鼓吹するもの」「C 國家主義的なもの」「D 愛國主義的または排外的なもの」「J 民主主義に反するもの」「M ポツダム宣言または聯合國總司令部の指令に反するもの」は、「1、最高司令官批判」「2、軍事（極東）裁判批判」「3、最高司令官による憲法起草という批判」「4、検閲への言及」「18、軍國主義宣伝」「19、國家主義宣伝」「21、大東亜（共栄圏）宣伝」「23、戦争犯罪人の弁護の正当化」「30、最高司令官（または地方部隊）への不適切な言及」と共通している。また、「I 婦人に對する壓制または婦人の墮落を取扱つたこれを是認したもの」と「24、占領軍將兵と日本人との（男女の）親密な關係描写」、「K 残忍、非道、暴行を謳歌したもの」と「28、暴力または社会不安の煽動」、「E 歴史の事實を歪曲するもの」と「29、真実でない（不正確な）記述」も同じ内容を指している。つまり、ここに挙げた 13 の「創作執筆上の禁止項目」は、単なる知識人による推測ではなく、GHQ 当局が実際に用いていた検閲方針を確実に把握した上で総括したものであり、この「創作執筆上の禁止項目」に順応すれば、GHQ の検閲をほぼ回避できたはずであった。

上月氏の文章に含まれていたこの 13 項目は GHQ の検閲によって「削除 (Delete)」の処分を受けたために、当時刊行された文章ではこの箇所が削除されている。しかし、『歴透』と上月氏の検閲項目が全く一致していたことは、当時の知識人たちが何らかの経路で GHQ の検閲項目を入手していたことを意味する。横手一彦はこうした暗黙の了解について、次のように述べている。

一三項目の配列順序から記述にいたるまでほぼ同一の典拠によつたものであると考えられる程に類似している。その情報の発信場所や伝播の経緯などをここに詳らかにできないが、検閲に対する被検閲者側の何らかの共通した対処方法、あるいは特定の連絡網の存在を窺わせる共通性である<sup>8</sup>。

横手の叙述にあるように、当時の知識人たちは



GHQの検閲に対して「何らかの共通した対処方法」を持っていたのである。安部が初出版の『終りし道の標べに』において「満州国」や「関東軍」といった言葉を使わず、改訂版のテキストではこれらの言葉を使用していることについて、彼がGHQの検閲項目中の「12、満州国における日本人処遇の批判」と「19、軍国主義宣伝」などの項目に抵触しないために行った意図的な行為であると、筆者は別の論文で指摘したことがある<sup>9</sup>。安部が配慮した検閲方針とは、恐らく上記の13項目の中の「A 軍国主義を鼓吹するもの」や「C 國家主義的なもの」などの項目だと思われる。つまり、安部公房は創作を始めた当初からGHQによる検閲を常に意識し、更に、非公開であった検閲項目の詳細まで熟知した上で、検閲方針に違反しないように配慮しつつ執筆をおこなっていた。この仮説が成立するならば、GHQの検閲が廃止されて以降に出版された作品の改訂版には、安部が初出版に含めることができなかった要素が見いだされるのではないだろうか。初出版のテキストではなく改訂版を収録している、徳間書房刊行の『夢の逃亡』の「後記」において、安部は次のように述べている。

当時の私は、濃霧の中をさまよっているような状態だった。今でも、べつに霧がはれたとおもっているわけではないが、あの時代の霧はまた格別だった。(下線筆者、以下同じ)<sup>10</sup>

下線を付した「霧」という言葉について、その具体的な内容を知ることはできないが、それがGHQの検閲を指し示している可能性は否定できない。自然現象としての「霧」の最大の特徴は、人間の視野から実物や風景を遮ることである。この時期のGHQによる検閲も、作者とテキストの間に障害物を作ることによって、作者がテキストを思うままに創作することを阻止すると同時に、読者の視野を遮る機能を果たしている。安部が述べている「あの時代の霧」とは、一つにはGHQによる検閲と、それが必然化する抑圧によって生み出されたものではないだろうか。次節では、小

説『牧草』の改稿に焦点をあて、安部と検閲との関連性を明らかにしたい。

## 2. 登場人物の差異と検閲——『牧草』

『牧草』は1947年10月に書き上げられ、48年3月号の『総合文化』に初めて掲載された安部の短編小説である。その執筆時期と刊行時期から推測されるように、本作はGHQの検閲期間中に創作された作品である<sup>11</sup>。

まず、『牧草』の梗概を紹介する。語り手の「私」は10年ぶりに過去に住んでいた家に戻り、家の現在の住人である「彼」と知り合いになる。医者である「彼」は、妻と二人でこの家に4年間住み続けている。「私」は「彼」の妻の美貌に惹かれる一方、「彼」の妻に異変があることに気づく。その一年後、「彼」から一通の手紙が届く。「彼」は手紙で、「妻」が精神分裂者であることを告げ、更に手落ちで妻を死なせてしまったことを告白していた。「私」は慌てて旧居に赴き、近くの牧草地で、「彼」らしき人物を発見するが、「彼」に気づかれないまま引き返す。

改訂版の『牧草』を収録した『夢の逃亡』の「後記」で、安部は次のように述べている。

そして、戦後だった。多少の注釈が必要かと思われるのは、たとえば、“名もなき夜のために”の中にしばしば出てくる、リルケの意味などについてだろう。リルケというのは、私にとって、じつは第二次大戦中のシンボルだったのだ。いま考えてみると、あのシンボルが意味しているものは、「死者の平和」だったような気がする。死となれあうために、私が選んだ、死の国への案内図だったのだ。私の戦後は、こんなふうに、まず死のイメージから出発しなければならなかったのである<sup>12</sup>。

ここで述べられているように、リルケは安部にとって「シンボル」となる重要な存在である。「死者の平和」

を意味するこの「シンボル」を通して、安部はリルケが描く「死の国」に魅了され、「戦後」直後の作品においては、「死者」や「死の国」といったリルケに由来する「死のイメージ」を自らの作品に散りばめるようになる。

先述したとおり、1968 年の徳間書房刊行の『夢の逃亡』に収録された安部の作品は、昭和 20 年代の作品を改訂したものである。しかし、この「死のイメージ」が、こうした昭和 20 年代の諸作品の主題になっていない点は注目に値する。例えば、『異端者の告発』（1948 年）では、「僕」は「X」を殺そうとするが、結局何もできず物語は終わる。『名もなき夜のために』（1948 年～49 年）では、自殺しようとする老人が描かれているが、この老人もやはり自殺することがない。つまり、「後記」で述べられている安部の思想は、初出版のテキストにおいては完全に実践されてはいない。『夢の逃亡』の中で、「死のイメージ」を主題の一つとして描いた唯一の作品が『牧草』である。「彼」は「手落ち」で自分の妻を殺したと告白するが、実は、妻は「彼」に殺されたのではなく、自殺していたのだ。その一部始終は初出版のテキストでは次のよう語られている。

その様子や声等から今日の発作は少しひどそう  
だと思い、すぐに戸棚の中からルミナル錠の小  
瓶を取出し、必要量だけ飲みますと寝台に横にして  
やりました。[...] いつもなら、瓶をちゃんと蔵っ  
て鍵かけて置くのですが、その日に限って机の  
上に出しっぱなしで階下に降りていったのです。  
[...]

と、妻はびっくりしてこちらを振り向き、獣のよ  
うな押しつけられたうめき声を出して、驚くほどの  
早業で机の上のルミナルの瓶を掴むと、私が  
飛び掛る間も無く一気に噛み砕き飲んでしまった  
のです。

それを見て私が愕然とある悲しい考えに達した  
のです。妻はあの分裂しきった観念の中で、ただ  
私に従順であろうとする家畜の様な本能が、その

憐れな脳髓を支配していたに違いありません。[...]  
しかし、一体どうしたら良いというのでしょうか。  
吐剤を用いたり、胃を洗滌したりして、いま一度  
あの美しい家畜の息を取り戻すべきでしょうか。  
それとも……

結局私は動きませんでした。そのまま、静かに  
寝息をたて始めた妻の枕元で、やがて呼吸が乱れ、  
脈が不整になり、そして息耐えてしまうまで、私  
はじっと待っていたのです<sup>13</sup>。

ここで述べられているように、精神分裂症を患っ  
ている妻は「彼」が不注意で置き忘れた薬を大量に  
飲むことによって自殺したのだ。問題は、「彼」には  
妻を助ける機会があったにも関わらず、結局、妻が亡  
くなるまで何もしなかったことである。そうだとすれ  
ば、「彼」が妻を殺したと言った方が妥当かもしれな  
い。しかし、「家畜の様な本能が、その憐れな脳髓を  
支配していたに違いありません」と述べたり、「いま一  
度あの美しい家畜の息を取り戻すべきでしょうか」と問  
いかけたりしているとすれば、「彼」は、生きている  
方が妻にとって苦しいことだと察していたに違いな  
い。死こそが彼女を解放する唯一の手段と考えたため  
に、妻が「息耐えてしまうまで」「じっと待っていた  
のです」。つまり、「私」は妻を愛しているために、苦  
しい状態から解放してあげたのである。別の見方をす  
れば、「彼」は妻が自殺したことを可能な限り否定し  
ようとしているのだ。このことは、安部が「H 直接間  
接を問わず自殺を是認したもの」という検閲項目に配  
慮した結果ではないだろうか。「彼」が妻の自殺を否  
定しなければ、作品は「自殺を是認したもの」という  
検閲方針に抵触する可能性がある。「彼」の過失が強  
調されるように、安部が意図的に描いたと思われる。  
しかし、この書き方から、安部が 13 個の検閲項目を  
意識していたと推測されるのだ。

ここで、視点を改めて医者「彼」に移す。「妻」  
が自殺に用いた薬を放置したことは過失だが、「彼」  
が妻を意図的に救助せずにいることは事実である。こ  
こでは、自殺と他殺が同時に描かれ、医者として設定

されている「彼」が、医者本来の使命である生命の救済とは逆に、人間の命を奪う暴力性を持っていることが示唆されている。しかし、注意すべきは、初出版と改訂版とでは、「彼」の暴力的側面の描写が異なっている点である。二つのテキストの終盤の描写は、「彼」の暴力性を明らかに異なったものとして描いている。

と同時に私は愕然として立止まった。今まで気付かなかったが、すぐ二十米も離れていない窪みの中に、真深に帽子を被り、黒い外套の衿を立てて坐っている男は……

私は気づかれないようにそっと引返した。そして丘を下る路々、遇わなくてよかった、遇わなくてよかった、と機械的に繰り返していた。何も此の寓話を我々のレールの上に引戻す必要はないではないか。（『牧草』初出版）<sup>14</sup>

と同時に、私は愕然として立ち上っていた。それまで気づかなかったが、すぐ二十メートルも離れていない窪みの中に、目深に帽子を被り、膝に獵銃をかかえ、黒い外套の衿を立てて坐っている男は……

私は気づかれないようにそっと引返した。幸い私は、この辺りの地理に詳しかったので、彼が見張っている林道を避けて、近道を来られたのだが……彼がああして待ち受けていたのは、一体誰だったのだろう……私か……それとも警官か……あるいは、あんがい彼自身だったのか……いずれにしても勝手に待つがいい……（『牧草』改訂版）<sup>15</sup>

初出版と比べて、改訂版の終盤は大幅に修正されているのがわかる。まず、改訂版は初出版の波線部分を削除して、下線部の内容を付け加えている。とりわけ、改訂版にしか見られない「膝に獵銃をかかえ」という表現は、「男」（先述の「彼」）の性格を変えてしまうほど重大な変更である。もともと「医者」として設定されている「男」には、人間を救助するイメージ

が付与されている。しかし、「男」は「獵銃」を持つことによって暴力的な人物へと変容し、本来持っている救済者としてのイメージが損なわれてしまう。そして、「目深に帽子」や「黒い外套」といった外見とも相まって、改訂版に登場する「男」は、武器を持つ暴力的な危険人物として提示されている。初出版にも同じく「目深に帽子」「黒い外套」などの表現が使われているが、そこに登場する「男」には、改訂版に漂う暴力的イメージが見られない。

次に、初出版と改訂版の終盤に登場する語り手の「私」の違いからも、「男」が抱く暴力的イメージの相違がうかがえる。例えば、初出版と改訂版では、同じく「私は気づかれないようにそっと引返した」とされているが、改訂版では、「幸い私は、この辺りの地理に詳しかったので、彼が見張っている林道を避けて、近道を来られたのだ」となっている。改訂版にしか見られないこの「見張っている」という表現は、「男」の暴力的イメージを裏書きしている。同時に、「私」が「彼が見張っている林道を避け」て通れたことに対して、「幸い」と考えていることも、暴力的存在へと化した「彼」への恐怖感に起因していると思われる。改訂版の終盤では、「私」は「彼」に「気づかれないようにそっと引返した」のである。これは、「私」が「彼」の暴力性を察したためであり、「男」の暴力性に怯えているからだと推測できる。一方、初出版の終盤では、「私」は同じく「彼」と「遇はなくてよかった」と思いながら、「気づかれないようにそっと引返した」のである。「私」が引き返した原因を知ることは困難だが、前後の文脈からして、「彼」の暴力性から逃れるために引き返したのではないことは確かであろう。

最後に、改訂版にのみ見られる「彼がああして待ち受けていたのは」「私か……それとも警官」という表現にあるように、正義を象徴する「警官」の対照物として、「彼」は悪の存在とされている。つまり、「彼」を「警官」の対極に置くことによって、その暴力性が不法な性質のものであることを告げ、「彼」が持つ暴力性が一般人にも向けられていることを示唆している。

初出版の人物設定とは異なり、改訂版に登場する「彼」は、凶器を持つことで暴力的な危険人物へと変容し、「彼」の暴力性は他人＝語り手の「私」に恐怖を実感させるほどのものである。また、この暴力は正義ではなく、悪を象徴するものである。初出版の「彼」の描写と比較すると、改訂版の「彼」は暴力的、且つ邪悪な人物とされ、こうした改訂によって、「彼」は人間を救助する医者という立場から、他人に恐怖感を与える暴力的存在へと変貌している。

では、安部はなぜ 40 年代に発表された初出版の『牧草』において、登場人物の「彼」を暴力的な危険人物として設定しなかったのだろうか。筆者は、その理由の一つが、当時の芸術家たちが一般に注意を払わざるを得なかった GHQ の検閲にあると考えている。前節では、安部公房が 13 個の検閲項目を意識しながら創作していたことを明らかにした。13 項目中にある「K 残忍、非道、暴行を謳歌したもの」という検閲方針はとりわけ注目すべきである。改訂版に見られる「膝に猟銃をかかえ」、「目深に帽子」をかぶり、「黒い外套」を着て牧草の中で「警官」を待ち受けている「彼」は、外観上、残忍さや暴力性を連想させる。従って、もし安部が初出版の『牧草』において、改訂版と同じように「彼」を暴力的存在として描いたとすれば、GHQ の検閲方針に抵触した可能性が極めて高い。

また、帽子を被り、銃を抱えながら牧草の中をさまよう「彼」の様子は、終戦直後の読者に戦争中の軍人のイメージを連想させたはずだ。従って、「彼」の暴力的な人物像は、「A 軍國主義を鼓吹するもの」や「B 仇討ちに關するもの」などの検閲項目に反する結果につながるかもしれない。実際、暴力を描くことによって発禁処分を受けた文章は少なくないため、『牧草』の初出版のテキストに「彼」の暴力性が見出せないのは、安部が当時の GHQ の検閲に配慮したためだと考えられる<sup>16</sup>。「彼」の暴力性と検閲との関連性は、初出版と改訂版における「彼」と妻との関係の違いからも推測できる。

「若し吾々が愛で結ばれたものなら、生涯を通

して愛の発見につとめたいですね […] とにかく私達はお互いに、そしてお互いから愛を発見しようと務めているのだから……」

妻は納得した様に深くうなずきました。(『牧草』初出版)<sup>17</sup>

「そうかもしれない。そうでないかもしれない。」  
「幸福だわ。」

妻は納得したように深くうなずき、そしてその一言で、私の記憶はふと夢から覚めたように消えてしまうのです。(『牧草』改訂版)<sup>18</sup>

引用部は「彼」と妻が結婚した後に交わされた会話である。改訂版では、初出版の内容が大幅に削除され、修正されていることがわかる。初出版では、妻の「婚姻」に関する疑問に対して、「彼」は「生涯を通して愛の発見につとめたい」というロマンに溢れる表現で返答している。こうした会話から、「彼」の妻への愛情が初出版のテキストでは前景化されていると言えよう。しかし、改訂版においては、妻への返答が削除されている。初出版に見られるロマンチックな言葉に代わって、「そうかもしれない。そうでないかもしれない。」という愛情のない表現が使われている。つまり、初出版に見られる「彼」の妻への愛情が、ここではないものとされているのだ。初出版の『牧草』においては、「彼」が愛情を込めた表現を使っていることから、妻を愛する男性像が作り出されている。改訂版において、愛の表現となる言葉が削除されたのは、改訂版にのみ現れている「彼」の暴力的かつ邪悪な人物像と表現を合致させるためだと思われる。しかし一方で、初出版における「彼」のロマンに溢れる表現は、妻への愛情を表していると同時に、妻を手落ちで殺したことへの後ろめたさを示唆している。この後ろめたさは、妻の自殺という既成事実に対する「彼」の自己救済であり、妻の自殺そのものへの否定的態度の表出でもある。妻が自殺した可能性を否定しようとしているのは、おそらく「H 直接間接を問わず自殺を是認したもの」や「J 婦人に對する壓制」などの検閲項目を警戒して



いる安部の意識の現れでもあるのではないだろうか。つまり、『牧草』の初出版において、妻への愛情を可能な限り描き出しているのは、GHQの検閲方針に抵触しないための巧妙な策略であったのかもしれない。

上記の改稿の他に、『牧草』の初出版と比較して、改訂版が初出版に多く見られる哲学的論述を大幅に削除している点も看過できない。例えば、初出版の冒頭部分に見られる自問自答に近い哲学的論述は改訂版では削除されている。理解し難い論述の削除は、小説を一層読みやすくする結果をもたらしている。興味深いことに、1968年の『夢の逃亡』に収録された安部の作品では、初出版の難解な哲学的記述はほぼ全て削除されている。その理由は明らかではないが、筆者は次の資料からその原因を推測してみたい。

実存主義がこわれはじめたのは、終戦後の体験だよ、瀋陽に一年半ばかりいた。社会の基準が徹底的にこわれるところを目撃して来たわけだ。恒常的なものに対する信頼を完全に失った<sup>19</sup>。

安部は作家として出発した当初から、実存主義などの哲学的世界に没頭していたが、終戦後の瀋陽での体験で、「実存主義がこわれはじめた」ことによって、「恒常的なものに対する信頼を完全に失った」のである。実存主義に代表される哲学的世界から離れることが、作品の哲学的記述の削除に繋がった可能性もある。同時に、実存主義の相対化は、安部の作品の文体の転換をも意味し、実存主義によってもたらされた創作上の束縛から解放されることを意味してもいた。こうした束縛からの解放が、GHQによる統治支配の終了と同時に進行していたことは注目に値する。言い換えれば、難解な箇所を削除して既成のテキストを簡易化する安部の改稿作業は、GHQによる言論統制などの政治的抑圧が解消しつつあったことを示唆してはいないだろうか。次節では、GHQによる検閲の終了直前に出版された『デンドロカカリヤ』の改稿を通して、GHQの検閲に対する安部公房の内面の変化を考察したい。

### 3. 検閲に関する安部公房の変化——『デンドロカカリヤ』

1949年8月号の雑誌『表現』に掲載された『デンドロカカリヤ』は、三年後の52年12月に改訂され、書肆ユリイカから改めて出版されている。『デンドロカカリヤ』の改稿の意義にいち早く注目した水永フミエは次のように述べている。

旧作の主題を変えることなく後年になって作品に手を入れるということは、それぞれの時期に安部の追求しているものが一貫していることを示しているといえよう。一方、旧作を旧作のままそっとしておけないのは、手法などの面で一作ごとに新しい試みを展開していったことを裏付けるものであるといえよう<sup>20</sup>。

引用にあるように、『デンドロカカリヤ』の改稿には、「手法などの面で」「新しい試みを展開」しようとした安部の思想的転換が反映されている。ここでの「新しい試み」としての「手法」とは、おそらく前節で述べた実存主義からシュールレアリスムへの文体の転換を指し示す。こうした文体の転換は、安部公房研究史における重要な課題にはなっているものの、文体の転換と明らかに関わっている『デンドロカカリヤ』の改稿について、とりわけ、初出版と改訂版の間に見られる差異を本格的に論じた先行研究は少ない<sup>21</sup>。

『デンドロカカリヤ』の初出版と改訂版では、顕著に異なるところが三箇所ある。まず、改訂版では、初出版の冒頭が大幅に削除されている。初出版の冒頭では、語り手の「ぼく」は「君」（「コモン君」と読者）に「植物病」に関する詳細な解説を語り始めている。しかし、改訂版では、この説明部分が削除され、初出版の語りがかなり進んだところから作品が始まっている。「植物病」に関する哲学的論述が削除されることによって、改訂版のテキスト全体が明確化されていることを指摘しておきたい。次に、改訂版では、語り手の「ぼく」ではなく、三人称のナレーターによって語

られている点が異なっている。最後に、改訂版では登場人物が整理され、初出版と比べてテキスト全体の人物関係が簡潔になっている。例えば改訂版では、コーヒーショップで「コモン君」と待ち合わせしている人間は「K 植物園長」のみで、初出版に登場する K 嬢などの人物は削除されている。こうした改稿はいずれも初出版に見られる複雑な構造を簡潔化して、理解しやすくする役割を果たしている<sup>22</sup>。鳥羽耕史は、改稿のプロセスを次のように分析している。

「デンドロカカリヤ」を改稿した時点の安部は「…」寓話によって、読者にある教訓や価値を諷刺的に伝えるためには、それを語る視点は安定しなければならない。初出版のように、様々に揺れ動く現実認識の葛藤のさなかに読者を迷いこませては、寓話は成立しないのである<sup>23</sup>。

鳥羽によれば、安部が『デンドロカカリヤ』を改稿したのは、彼が寓話を通して「教訓や価値を」読者に伝えようとしたためであり、そのためには、語りが明白に理解されなければならないのである。初出版では、哲学的論述が過度な分量を占めているために、鳥羽が述べるように、寓話としては「成立しないのである」。つまり、『デンドロカカリヤ』の改稿は、『夢の逃亡』の改稿の系譜、すなわち、難解な叙述を削除することによって、テキスト全体の構造を簡易化する方向性を受け継いでいると言えるだろう。『牧草』の改稿について論じたように、文章構造の簡易化は、安部の実存主義からの離脱とおそらく関わっている。しかし改稿の根本的原因は GHQ の検閲への配慮にある。では、『デンドロカカリヤ』の改稿の背後にも、GHQ の検閲との関連はあるのだろうか。

初出版の『デンドロカカリヤ』が脱稿されたのは 1949 年 4 月 20 日で、刊行年月に注目すると、初出版が GHQ の事後検閲の期間中に創作されたことがわかる。実際、同年 8 月号の『表現』に掲載された本作は GHQ の検閲を確かに受けていた<sup>24</sup>。ただし、初出版が刊行された 49 年 8 月には、検閲は廃止に近づき、

GHQ の支配統治自体も終了に向かいつつあった。こうした中、出版物における刊行後の検閲は激減し、作家に対する創作上の制限も緩和されつつあったのである<sup>25</sup>。前節の『牧草』論で述べたように、GHQ の検閲が厳しく実行されていた間は、安部は検閲に関して従順な態度を示していた。従って、検閲終了直前に刊行された初出版の『デンドロカカリヤ』と、占領終了後に出版された改訂版の『デンドロカカリヤ』を比較することによって、GHQ による検閲への安部の認識の変化が窺われるはずである。斎藤朋誉は『デンドロカカリヤ』の植物園長に関して、次のように述べている。

コモン君が丘の上の焼跡で園長と邂逅し、海軍ナイフを奪われた後に「グルー」と喉を鳴らす点を挙げたい。「グルー」とは、ジョセフ・クラーク・グルーを指すものであろう。グルーは、一九三二年から一九四一年まで駐日大使を務めた外交官で、GHQ 側に日本の天皇制の存続を働きかけるなどの対日宥和外交を推進した人物であり、その戦後日本の在り方に大きな影響を与えた人物の名を、植物園の園長が口にしたことは示唆的である<sup>26</sup>。

斎藤は、植物園長の存在が GHQ 側の人物を象徴していると考えている。森村優太も斎藤の論考を敷衍して、『デンドロカカリヤ』と GHQ による検閲との関連性を指摘している<sup>27</sup>。

ただし、江藤淳が『閉ざされた言語空間』で述べているように、検閲に携わる日本人検閲員は、後に「革新自治体の編集長、大会社の役員、国際弁護士、著名なジャーナリスト、学術雑誌の編集長、大学教授等々」<sup>28</sup>になった。そのような高度な知識をもった検閲員集団が、初出版の『デンドロカカリヤ』における GHQ の検閲制度への言及を見逃す可能性はほぼないと言っていいだろう。例えば、実際に検閲官を担当した甲斐弦の話によれば、検閲官は GHQ への隠れた言及に格別な注意を払っていたのである<sup>29</sup>。初出版の『デンドロカカリヤ』には GHQ の検閲制度や、GHQ の

高官が示唆的に描かれているものの、本作が検閲に抵触せず出版されたことは興味深い。実際、検閲員は『デンドロカカリヤ』におけるGHQへの示唆的描写のみではなく、検閲方針に違反している他の箇所も見過している。

『デンドロカカリヤ』に関するこれまでの先行研究では、植物への変形や「植物病」の意味合いが多く論じられ、次のような結論が導き出されている。田中裕之は、「植物病」とは「プシコノイローゼ（精神神経症）を意味し、植物に変形した状態は、精神分裂病的な症状を呈している」<sup>30</sup>と分析した上で、「本作品を、迫り来る政治の右傾化の中で、敗戦によりいったん国家権力から解放された人々が、再び台頭してきた権力によって再組織されていく様を描いたもの」<sup>31</sup>と論じている。森村優太は、田中の論文で述べられている「再組織」について、「思想が解放されたことによって新たな力を得た人々は、また現れる別の組織によって再組織される。この、再組織をする存在こそ、GHQであったと考えて間違いないだろう」<sup>32</sup>と敷衍している。斎藤朋誉は、〈デンドロカカリヤ〉の葉が日本を象徴している菊と類似していることから、「デンドロカカリヤという植物は、菊に似た葉を有する植物である。その菊の葉を持つが、菊の花は持たないデンドロカカリヤに変形するということは、日本であるが日本ではないという、敗戦による半植民地化という事実を、民衆が受け入れることを意味するもの」<sup>33</sup>と述べている。鳥羽耕史は園長の表現に注目し、〈デンドロカカリヤ〉の意味合いについて、「この「内地」という言葉に注目したい。[...] デンドロカカリヤとは外地や海軍、すなわち戦争の記憶と結びつく、きわめて反・戦争的存在であることが読みとれるだろう」<sup>34</sup>と論じている。

上記の先行論は、植物への変形や「植物病」の意味合いを分析したもので、初出版の『デンドロカカリヤ』を対象として、戦後の日本に対する安部公房の認識を論じている。そして、いずれの解釈に基づいても、『デンドロカカリヤ』はGHQの検閲方針に抵触していることになる。例えば、森村が述べている「別の組織」とは「GHQ」とであるという結論は、先述したように、

検閲制度に言及しているために、「4、検閲への言及」という方針に反している。森村の論の基礎となっている田中の「国家権力」による「再組織」は、テキストがGHQの支配統治を暗にほめかしていることによって、「1、最高司令官批判」という項目に抵触する可能性を持っている。斎藤が強調する「敗戦による半植民地化」も、GHQの統治制度への批判になるため、これらの項目に違反している可能性を持つ。鳥羽は植物としての〈デンドロカカリヤ〉自体は「反・戦争的存在」だと述べているが、〈デンドロカカリヤ〉が氏の述べる「戦争の記憶」を想起させるならば、作品が「18、軍国主義宣伝」や「19、国家主義宣伝」といった検閲項目に抵触していたと判断されることも考えられる。

しかし、初出版の『デンドロカカリヤ』は上記のいずれの方針にも抵触せず、円滑に出版されたのである。その理由の一つが、初出版の『デンドロカカリヤ』が刊行される際、GHQの検閲が廃止に等しい状態となっていたからである。初出版の『デンドロカカリヤ』が検閲されることなく出版されたことは、テキストがGHQの検閲項目に抵触していないと判断されたと言うよりは、GHQの支配統治自体に揺らぎが生じていたために、言論統制が緩和されていたからだと考えられる。

従って、検閲が厳格であった時期に刊行された初出版の『牧草』において安部が直面していた、自由に語ることができないという創作上のジレンマは、初出版の『デンドロカカリヤ』においては意識されなかったはずである。『牧草』のように、改稿を通して検閲期間中に語りえなかったことを改訂版で描き直す必要はない。

しかし、初出版の『デンドロカカリヤ』が刊行された49年8月から僅か3年後の1952年12月に、改訂版の『デンドロカカリヤ』が出版された。GHQによる検閲は1949年10月31日に完全に廃止され、サンフランシスコ平和条約発効後(1952年4月28日)には、GHQの支配統治自体も終了した。それ以降は、GHQの支配統治についても、自由に表現できるようになっ



た。その時期に、『デンドロカカリヤ』の改訂版が出版されたことには重大な意義があると思われる。『牧草』などの改稿が20年後に行われたのに対して、『デンドロカカリヤ』の改稿が極めて早い時期に行われたことは、当時の社会情勢に安部が迅速に対応したことを意味している。おそらく、改訂版の出版背景には、日本が依然としてアメリカに抑圧されていた、当時の社会状況を読者に想起させようとする安部の姿勢が隠されていたのではないだろうか。

証拠の一つが、作品名にもなっている〈デンドロカカリヤ〉である。〈デンドロカカリヤ〉とは、学名〈*Dendrocacalia crepidifolia*〉の日本語表記であり、通常〈ワダンノキ〉と呼ばれる小笠原諸島固有の植物である<sup>35</sup>。植物としての〈デンドロカカリヤ〉が小笠原諸島の固有種であることは注目に値する。サンフランシスコ平和条約の第二章「領域」の第三条では、小笠原諸島について次のように記されている

日本国は、[…] 嬬婦岩の南の南方諸島（小笠原群島、西之島及び火山列島を含む。）並びに沖の鳥島及び南鳥島を合衆国を唯一の施政権者とする信託統治制度の下におくこととする国際連合に対する合衆国のいかなる提案にも同意する。このような提案が行われる且つ可決されるまで、合衆国は、領水を含むこれらの諸島の領域及び住民に対して、行政、立法及び司法上の権力の全部及び一部を行使する権力を有するものとする<sup>36</sup>。

ここで言われているように、平和条約の発効後しばらくの間、小笠原諸島はアメリカに支配されていた。改訂版が刊行されたのは、小笠原諸島がまだアメリカ統治下にあった時期であるため、『デンドロカカリヤ』というタイトルはアメリカによる支配統治を示唆せざるを得ない<sup>37</sup>。改訂版『デンドロカカリヤ』の刊行直後、安部はエッセイで次のように述べている。

支配民族の特徴はたとえば今日本にいるアメリカ人であるが、その土地の人間を人間としてより

も、植物や風景のように見るということだ。つまり土地の人間は風物の一部なのである。よほどながく暮しても、この事情はなかなか変わらない<sup>38</sup>。

安部が言うように、アメリカ人が日本人を「植物や風景のように見る」ことは、『デンドロカカリヤ』において、植物に変身した「コモン君」が異様な視線を受けることを思い起こさせる。安部公房は改訂版の『デンドロカカリヤ』において、平和条約が発効したにも関わらず、一部が依然としてアメリカに支配されており、完全に独立していない日本の現状を示唆的に描いていると言えるだろう。注意すべきは、敗戦直後の日本が半植民地となっている現状を安部が批判していた点である。しかし、初出版と改訂版ではその批判の意味合いが異なっている。この問題について、鳥羽耕史が次のような示唆に富む論考を行っている。

この改稿の時点で、現在の会という会合に安部は参加していた。これはルポルタージュを志向する会合であり、[…] 彼は現在の会に参加していく中で、ルポルタージュと寓話的なものとの接点を探っていた。[…] 日本共産党の主流派の黨員として活躍することになった安部は、その立場から旧作を書き換えたとみなすことができる。様々なイデオロギーが乱立しせめぎ合っている構図を、コモン君と植物園長という大きな対立関係へと収斂させた改稿版のあり方は、「植民地的な精神状況」にあった日本における Kommunismus の寓話への志向を強めている<sup>39</sup>。

鳥羽が述べるように、改訂版の『デンドロカカリヤ』が刊行された際、安部は日本共産党に入党し、ルポルタージュという社会現実をありのままに記録する文学様式に没頭していた。この時期の安部は「ルポルタージュと寓話的なものとの接点を探っていた」ために、作品にはルポルタージュ的な側面と、寓話的な側面が同時に備わることになった。安部は花田清輝や岡



本太郎などに影響されて、実存主義やシュールレアリスムに傾倒し、彼の作風は哲学的論述の多い難解なものからアイロニーに富む寓話的な作風に変貌したのである。こうした傾向を示す最初の作品が初出版の『デンドロカカリヤ』である。従って、安部が初出版の『デンドロカカリヤ』を改稿し、改めて語り手や登場人物を整理し、複雑な文章構造を一層簡略化したのは、おそらく、当時の社会状況をルポルタージュ風に描こうとしたからだと思われる。例えば、「コモン君」と植物園長との会話は、初出版と改訂版に次のような違いが見られる。

「おや、デンドロカカリヤだ！」

声は耳の内側からひびき出したように思えた。顔が裏返しになっていたんだから、無理もないんだね。

驚いて、目を開けると、断層面にこんな光景が映ってたんだよ。

[…]

「内地でデンドロカカリヤが採集できるなんて、まったく珍しいことだよ」

そう言いながら、男はいきなりナイフを振上げ、足元の土に、ぐさりと突刺した。[…] 顔は下から突上げられて、原・顔から外れると、かさぶたみたいにはげかったよ。一寸の間だったが激しい刹那だった。断層面が大きく傾斜した。(『デンドロカカリヤ』初出版)<sup>40</sup>

「やっぱり、デンドロカカリヤだ！」

声は耳の内側からひびき出したように聞こえた。顔が裏返しになっていたんだから、無理もない。

[…]

「内地でデンドロカカリヤが採集できるなんて、まったく珍しいことだよ。」

そう言いながら、男はいきなりナイフを振上げ、足元の土に、ぐさりと突刺した。[…] 顔は下から突上げられて、外れると、かさぶたみたいには

げかかったよ。一寸の間だったが激しい刹那だった。(『デンドロカカリヤ』改訂版)<sup>41</sup>

改訂版では初出版の下線部の表現、「驚いて、目を開けると、断層面にこんな光景が映ってたんだよ」、「断層面が大きく傾斜した」や「原・顔から外れる」などが削除されている。改訂版のテキストでは難解な表現が削除され、読者の視点は「コモン君」と「植物園長」との会話と心理描写に集中する。その結果として、「コモン君」と「植物園長」との会話に示唆されている戦後日本の社会状況の象徴性が読者により強く意識されることになる。それに対して、初出版の読者は、「原・顔」や「断層面」などの、テキストの円滑さを損なう表現に戸惑い、そうした哲学的表現の意味合いを探ると同時に、「コモン君」と「植物園長」とのやりとり自体に追いつくことができなくなる。そのため、作品に込められた日本の現状への批判を看過してしまう可能性が生じる。

サンフランシスコ平和条約発効後に、日本本土が持つ相対的な自由と、小笠原諸島の絶対的被支配状況との対立が深刻化する中、安部は『デンドロカカリヤ』を即座に改訂した。初出版に見られる難解な箇所が削除されることによって、一層明晰になった改訂版のテキストは、サンフランシスコ平和条約発効後においても、日本が依然としてアメリカに政治的に抑圧されている状況をルポルタージュ的な文体でストレートに描いている。初出版と改訂版の『デンドロカカリヤ』は、同じ戦後日本の状況を批判しているものの、改訂版では、安部の批判的眼差しはより徹底しており、日本共産党員としてのアイデンティティを垣間見ることでもできるはずだ。

初出版の『牧草』執筆の際には、GHQによる検閲は依然として厳しい状態であったため、安部は可能な限り検閲方針に抵触しないように創作していた。しかし、初出版の『デンドロカカリヤ』が刊行された時期、GHQによる検閲は終了間際だったため、安部は、GHQによる占領統治を暗に批判し、本来最も厳しいはずの検閲方針に対して意識的な挑発を行ったのでは

なかっただろうか。更に、平和条約の発効によって言論統制が全て解除された後に、安部は『デンドロカカリヤ』の改訂版を即座に出版し、タイトルや登場人物の象徴性を明確化し、占領終了後の日本が依然としてアメリカに抑圧されていたことを痛烈に批判している。

安部公房は、検閲終了間際に刊行された初出版の『デンドロカカリヤ』と、検閲が完全に廃止されてから出版された改訂版の『デンドロカカリヤ』において、日本がGHQによって支配統治されていることをアイロニカルに描いている。検閲項目に意図的に抵触しようとした安部の行為は、検閲が厳格に実行されている時期において、巧みな策略によって検閲方針を避けようとする彼の行為とは対照的である。『デンドロカカリヤ』を分析することによって、GHQの検閲に対する安部の認識が明確化されうるのだ。また、『デンドロカカリヤ』に関する先行研究の結論も、実はGHQによる検閲が終了したことを前提としたものであることをここで指摘したい。

## おわりに

本論文は、安部公房の初期作品『牧草』と『デンドロカカリヤ』を研究対象として、それぞれの初出版と改訂版との差異と、GHQによる検閲との関連性を考察することによって、安部がGHQの検閲を意識しながら創作していたことを明らかにした。

『牧草』の初出版では、主人公は妻を愛する医者として設定されている。しかし、改訂版では、主人公は武器を持つ暴力的な人物へと変容し、妻への愛情も初出版と比べて希薄になっている。改訂版で前景化されている主人公の暴力的イメージや、妻に対する冷淡な対応が、初出版に見られないのは、安部が検閲項目中

にある「残忍、非道、暴行を謳歌したもの」や「婦人に對する壓制」といった検閲方針に対して警戒しているからだと思われる。

『デンドロカカリヤ』の初出版は、GHQの検閲が廃止寸前になっていた時期に執筆されたため、GHQによる政治的抑圧に言及することが可能となったのである。占領終了後に出版された改訂版では、初出版に見られた複雑な文章構造を簡潔に改稿することによって、GHQの言論統制が続いていた時期には不可能だった、占領下の体制への言及が一層明瞭になっている。つまり、『デンドロカカリヤ』の初出版と改訂版が問題なく出版されたことは、GHQの支配統治に揺らぎが生じ、文学創作に自由な言論空間が与えられたことを意味している。

初出版の『デンドロカカリヤ』と改訂版の『デンドロカカリヤ』が、検閲体制によって抑圧されていた表現を繰り返し使用していることは、検閲が厳格に実施されていた時期に出版された『牧草』の初出版と改訂版の表現の差異とは非常に対照的である。安部公房には、例えば日本共産党入党によって権力との闘争に没頭するイメージが固定化されているが、GHQによる検閲期間中には、検閲という権力による政治的抑圧に対して、従順な態度を示してもいたのである。

[付記] 本稿は2017年9月2日にNova University of Lisbonで行われたThe 15th European Association for Japanese Studies International Conferenceで発表した報告“The Politics of the Oppressed and Experience in Kōbō Abe’s Early Works”を加筆修正したものである。本論文は、2017年度村田学術振興財団の研究助成(H29海人07)による成果である。

## 注

- 1 検閲項目の具体的内容に関しては諸説ある。本稿では横手一彦の『被占領下の文学に関する基礎的研究論考編』を参照して31項目とするが、江藤淳の『閉ざされた言語空間』によれば、検閲項目は30であり、横手の著作に書かれている第20項目「封建思想の賛美」がない。
- 2 横手一彦『被占領下の文学に関する基礎的研究論考編』武蔵野書房、1996年、pp. 28-30
- 3 『安部公房全集1』（新潮社、1997年）によれば、「中埜肇宛書簡 第9信」と「第10信」にはそれぞれ検閲印「C.C.D.J.-4065」「C.C.D.J.-2289」が押されている。「C.C.D.」とは「民間検閲支隊」（Civil Censorship Detachment）のことを指し示す。
- 4 安部公房「シュールリアリズム批評」『安部公房全集2』新潮社、1997年、pp. 262-263
- 5 『歴透』第一巻第一号、1946年、p. 52
- 6 上月木代次「私の創作態度（承前）」『大鉄文芸』第七号、1947年、p. 4
- 7 前掲書、pp. 4-5
- 8 前掲書2、p. 31
- 9 解放「安部公房初期作品研究——「抑圧の物語」をめぐって」『言語・地域文化研究』第24号、東京外国語大学、2018年
- 10 安部公房「後記」『夢の逃亡』徳間書店、1968年
- 11 『牧草』を始め、1948年3月号の『総合文化』に収録されている文章は全て検閲されている。その検閲文書では、「Possible Information」のところに「NO」と記入され、「Possible Violation」のところにも「NO」とチェックされ、文章が検閲方針に反していないと判断されている。
- 12 前掲書10
- 13 安部公房「牧草」『安部公房全集1』新潮社、1997年、pp. 410-412
- 14 前掲書、p. 414
- 15 安部公房「牧草」『夢の逃亡』徳間書店、1968年、p. 121
- 16 1947年6月に刊行された雑誌『曠原』の中で、「秋の苦痛」という詩は検閲によって削除された。その理由が「Incitement to Violence or Unrest」という検閲項目に違反していたからである。その根拠となっている表現が「生きる為に闘争を繰返してゐる、日本のすべての人々が、幸福に暮らせるのでなくして、誰が自由の世と言ひ誰が民主主義の社会と言へよう」である。
- 17 前掲書13、pp. 408-409
- 18 前掲書15、p. 114
- 19 安部公房「解体と総合」『安部公房全集5』新潮社、1997年、p. 441
- 20 水永フミエ「安部公房「デンドロカカリヤ」論」『山口国文』第8号、1985年、p. 75
- 21 『デンドロカカリヤ』の改稿を論じた先行研究として、水永フミエ「安部公房「デンドロカカリヤ」論」と鳥羽耕史「「デンドロカカリヤ」と前衛絵画——安部公房の「変貌」をめぐって」（『日本近代文学』第62号）が挙げられるが、いずれもテキストの差異に焦点を当てていない。
- 22 水永フミエは「安部公房「デンドロカカリヤ」論」の中で、『デンドロカカリヤ』の初出版と改訂版との差異が同じく三点あると指摘している。ただし、水永は本稿で述べている、語り手の「ぼく」がなくなることによって文章が三人称で語られている改訂を指摘せず、その代わり、改訂版には、初出版に描かれている「太陽」の描写がないことを指摘している。作品の全体における寓話性が明晰に伝えられることを考慮すれば、本稿で指摘している三人称で語ると改訂の意味合いがより重要だと思われる。
- 23 鳥羽耕史「「デンドロカカリヤ」と前衛絵画——安部公房の「変貌」をめぐって」『日本近代文学』第62号、2000年、p. 109
- 24 初出版の『デンドロカカリヤ』を収録している雑誌『表現』第二巻第7号にはGHQによる検閲印が記されているが、独立した検閲文書は付されていない。『表現』第一巻6号（1948年12月号）から独立した検閲文書がなくなり、表紙には検閲記号のみ残されている。
- 25 古川純解説、古川純、岡本篤尚訳『GHQ日本占領史 第17巻 出版の自由』日本図書センター、1999年、p. 24
- 26 斎藤朋誉「安部公房「デンドロカカリヤ」論——〈集光装置〉としての「眼」」『日本文学論究』第72巻、2013年、p. 62

- 27 森村優太「『デンドロカカリヤ』論」『佛教大学大学院紀要』第43号、2015年、p. 148
- 28 江藤淳『閉ざされた言語空間』文藝春秋、2016年、p. 252
- 29 甲斐弦の記述によれば、検閲官は検閲訓練を受ける際、手紙やハガキの内容に関して、とりわけ17項目の検閲方針に従って練習を繰り返した。そのうち、GHQに関する項目は7項目を独占している。(『GHQ 検閲官』葦草房、1995年、pp. 133-134)
- 30 田中裕之『『デンドロカカリヤ』論——《植物病》の解明を中心に』『国文学攷』第128号、1990年、p. 6
- 31 前掲書、p. 9
- 32 前掲書27、p. 147
- 33 前掲書26、p. 62
- 34 前掲書23、p. 104
- 35 豊田武司の『小笠原諸島固有植物ガイド』(ウッズプレス、2014年)と宮脇昭編著の『日本植生誌・第10巻・沖縄・小笠原』(至文堂、1989年)を参照した。
- 36 『日本外交文章——サンフランシスコ平和条約——調印・発行』(外務省、2009年)、p. 148
- 37 小笠原諸島が正式に日本政府に返還されたのは小笠原返還協定が調印された1968年4月5日である。本稿は、真崎翔の『核密約から沖縄問題へ——小笠原返還の政治史』(名古屋大学出版会、2017年)、石原俊の『近代日本と小笠原諸島——移民島の島々と帝国』(平凡社、2007年)を参照した。
- 38 安部公房「瀋陽十七年」『安部公房全集4』新潮社、1997年、p. 87
- 39 前掲書23、pp. 108-109
- 40 安部公房「デンドロカカリヤ」『安部公房全集2』新潮社、1997年、p. 243-244
- 41 安部公房「デンドロカカリヤ」『安部公房全集3』新潮社、1997年、p. 356-357